

森 鷗 外

森 鷗 外

新潮社版



日本文学全集 3

森 鷗 外

発行／1967年9月15日 十一刷／1969年9月25日

発行者／佐藤亮一 東京都新宿区矢来町71

発行所／株式会社・新潮社 東京都新宿区矢来町71

電話東京(260)1111(大代) 振替東京808 郵便番号162

印刷所／中央精版印刷株式会社 製本所／大日本製本所

本文用紙／本州製紙株式会社

函貼／三菱製紙株式会社 製函／文京紙器株式会社

カバー・扉・見返／特種製紙株式会社

表紙クロス／日本クロス工業株式会社

乱丁・落丁本はお取替えいたします Printed in Japan 1967

目次

舞姫	五
追難	二三
斗タ・セクスアリス	二九
青年	一〇一
百物語	二五一
興津弥五右衛門の遺書	二六七
阿部一族	二七七
雁	三〇九
堺事件	三九七

山椒大夫

四一九

魚玄機

四四七

じいさんばあさん

四六一

高瀬舟

四六九

高瀬舟縁起

四七九

寒山拾得

四八一

寒山拾得縁起

四八九

注解

四九一

年譜

五〇三

解説

五二五

石川淳

森

鷗

外

舞 姫

石炭をば早や積み果てつ。中等室の卓のほとりはいと静にて、熾熱燈の光の晴れがましきも徒なり。今宵は夜毎にここに集い来る骨牌仲間も「ホテル」に宿りて、舟に残れるは余一人のみなれば。

五年前の事なりしが、平生の望足りて、洋行の官命を蒙り、このセイゴンの港まで来し頃は、目に見るもの、耳に聞くもの、一つとして新ならぬはなく、筆に任せて書き記しつる紀行文日ごとに幾千言をかなしけん、当時の新聞に載せられて、世の人にもてはやされしかど、今日になりておもえば、穉き思想、身の程知らぬ放言、さらぬも尋常の動植金石、さては風俗などをさえ珍しげにしるししを、心ある人はいかにか見けん。こたびは途に上りしとき、日記ものせんとて買い

し冊子もまだ白紙のままなるは、ドイツにて物学びせし間に、一種の「ニル・アドミラリイ」の氣象をや養い得たりけん、あらず、これには別に故あり。

げに東に還る今の我は、西に航せし昔の我ならず、学問こそ猶心に飽き足らぬところも多かれ、浮世のうきふしをも知りたり、人の心の頼みがたきは言うも更なり、われとわが心さえ変り易きをも悟り得たり。きのうの是はきょうの非なるわが瞬間の感觸を、筆に写して誰にか見せん。これや日記の成らぬ縁故なる、あらず、これには別に故あり。

嗚呼、プリンジシイの港を出でてより、早や二十日あまりを経ぬ。世の常ならば生面の客にさえ交を結びて、旅の憂さを慰めあうが航海の習なるに、微恙にことよせて房の裡にのみ籠りて、同行の人々にも物言うことの少きは、人知らぬ恨に頭のみ悩ましたればなり。此恨は初め一抹の雲の如く我心を掠めて、スイスの山色をも見せず、イタリアの古蹟にも心を留めさせず、中頃は世を厭い、身をはかなみて、腸日ごとに九廻すともいふべき慘痛をわれに負わせ、今は心の

奥に凝り固まりて、一点の翳とのみなりたれど、文読むごとに、物見るごとに、鏡に映る影、声に応ずる響の如く、限なき懐旧の情を喚び起して、幾度となく我心を苦む。嗚呼、いかにしてか此恨を銷せん。若し外の恨なりせば、詩に詠じ歌によめる後は心地すがすがしくもなりなん。これのみは余りに深く我心に彫りつけられたればさはあらじと思えど、今宵はあたりに人も無し、房奴の来て電氣線の鍵を振るには猶程もあるべければ、いで、その概略を文に綴りて見ん。

余は幼き比より厳しき庭の訓を受けし甲斐に、父をば早く喪いつれど、学問の荒み衰うることなく、旧藩の学館にありし日も、東京に出て予備費に通いしときも、大学法学部に入りし後も、太田豊太郎という名はいつも一級の首にしるされたりしに、一人子の我を力になして世を渡る母の心は慰みけらし。十九の歳には学士の称を受けて、大学の立ちてよりその頃までにまたなき名誉なりと人にも言われ、某省に出仕して、故郷なる母を都に呼び迎え、樂しき年を送ること三とせばかり、官長の覚え殊なりしかば、洋行して一課の

事務を取り調べよとの命を受け、我名を成さんも、我家を興さんも、今ぞとおもう心の勇み立ちて、五十を踰えし母に別るをもさまで悲しとは思わず、遙々と家を離れてベルリンの都に來ぬ。

余は模稜たる功名の念と、檢束に慣れたる勉強力とを持ちて、忽ちこのヨオロッパの新都の中央に立てり。何等の光彩ぞ、我目を射んとするは。何等の色沢ぞ、我心を迷わさんとするは。菩提樹下と訳するとき、幽静なる境なるべく思われるれど、この大道髪の如きウンテル・デン・リンデンに來て両辺なる石だたみの人道を行く隊々の士女を見よ。胸張り肩聳えたる士官の、まだウイルヘルム一世の街に臨める窓に倚り玉う頃なりければ、様々の色に飾り成したる礼装をなしたる、妍き少女のパリまねびの粧したる、彼も此も目を驚かさぬはなきに、車道の土瀝青の上を音もせで走るいろいろの馬車、雲に聳ゆる樓閣の少しとぎれたる処には、晴れたる空に夕立の音を聞かせて漲り落つる噴井の水、遠く望めばブランデンブルク門を隔てて緑樹枝をさし交わしたる中より、半天に浮び出でたる凱

旋塔の神女の像、この許多の景物目睫の間に聚まりたれば、始めてここに來しものの応接に違なきも宜なり。されど我胸には縦いかなる境に遊びても、あだなる美観に心をば動さじの誓ありて、つねに我を襲う外物を遮り留めたりき。

余が鈴索を引き鳴らして謁を通じ、おおよけの紹介状を出だして東來の意を告げしプロシヤの官員は、皆快く余を迎え、公使館よりの手つづきだに事なく済みたらましかば、何事にもあれ、教えもし伝えもせんと約しき。喜ばしきは、わが故里にて、ドイツ、フランスの語を学びしことなり。彼等は始めて余を見しとき、いづくにていつの間にかくは学び得つと問わぬことなかりき。

さて官事の暇あるごとに、かねておおよけの許をば得たりければ、ところの大学に入りて政治学を修めんと、名を簿冊に記させつ。

ひと月ふた月と過す程に、おおよけの打合せも済みて、取調も次第に拂り行けば、急ぐことをば報告書に作りて送り、さらぬをば写し留めて、ついには幾巻を

かなしけん。大学のかたにては、釋き心に思い計りしが如く、政治家になるべき特科のあるびょうもあらず、此か彼かと心迷いながらも、二三の法家の講筵に列ることにおもひ定めて、謝金を収め、往きて聴きつ。

かくて三年ばかりは夢の如くにたちしが、時來れば包みても包みがたきは人の好尚なるらん、余は父の遺言を守り、母の教に従い、人の神童なりなど褒むるが嬉しさに怠らず学びし時より、官長の善き働き手を得たりと奨ますが喜ばしさにたゆみなく勤めし時まで、ただ所動的、器械的の人物になりて自ら悟らざりしが、今二十五歳になりて、既に久しくこの自由なる大学の風に当りたればにや、心の中なにとなく妥ならず、奥深く潛みたりしまことの我は、ようよう表にあらわれ、きのうまでの我ならぬ我を攻むるに似たり。余は我身の今の世に雄飛すべき政治家になるにも宜しからず、また善く法典を諳じて獄を断ずる法律家になるにもふさわしからざるを悟りたりと思ひぬ。

余は私に思うよう、我母は余を活きたる辞書となさんとし、我官長は余を活きたる法律となさんとやしけ

ん。辞書たらんは猶お堪うべけれど、法律たらんは忍ぶべからず。今までは瑣々たる問題にも、極めて丁寧にいらいしつる余が、この頃より官長に寄する書には連りに法制の細目に拘うべきにあらぬを論じて、一たび法の精神をだに得たらんには、紛々たる万事は破竹の如くなるべしなどと広言しつ。又大学にては法科の講筵を余所にして、歴史文学に心を寄せ、漸く蔗を嚼む境に入りぬ。

官長はもと心のままに用いるべき器械をこそ作らんとしたりけめ。独立の思想を懷きて、人なみならぬ面もちしたる男をいかでか喜ぶべき。危きは余が当時の地位なりけり。されどこれのみにては、なお我地位を覆えずに足らざりけんを、日比ベルリンの留学生の中に、或る勢力ある一群と余との間に、面白からぬ関係ありて、彼人々は余を猜疑し、又遂に余を讒誣するに至りぬ。されどこれとても其故なくてやほ。

彼人々は余が俱に麦酒の杯をも挙げず、球突きキックの棒をも取らぬを、かたくななる心と慾を制する力とに帰して、且は嘲り且は嫉みたりけん。されどこは余を知

らねばなり。嗚呼、此故よしは、我身だに知らざりしを、怎でか人に知らるべき。わが心はかの合歡ハルカという木の葉に似て、物触れば縮みて避けんとす。我心は処女に似たり。余が幼き頃より長者の教を守りて、学の道をたどりしも、仕の道をあゆみしも、皆な勇氣ありて能くしたるにあらず、耐忍勉強の力と見えしも、皆な自ら欺き、人をさえ欺きつるにて、人のたどらせる道を、唯だ一条にたどりしのみ。余所に心の乱れざりしは、外物を棄てて顧みぬ程の勇氣ありしにあらず、唯外物に恐れて自らわが手足を縛せしのみ。故郷を立ちいずる前にも、我が有為の人物なることを疑わず、又我心の能く耐えんことを深く信じたりき。嗚呼、彼も一時。舟の横浜を離るるまでは、天晴豪傑アハレハヤシと思ひし身も、せきあえぬ涙に手巾を濡らしつるを我れ乍ら怪しと思ひしが、これぞなかなか我本性なりける。此心は生れながらにやありけん、又早く父を失いて母の手に育てられしによりてや生じけん。

彼人々の嘲るはさることなり。されど嫉むはおろかならずや。この弱くふびんなる心を。

赤く白く面を塗りて、赫然たる色の衣を纏い、珈琲店に坐して客を延く女を見ては、往きてこれに就かん勇氣なく、高き帽を戴き、眼鏡に鼻を挟ませて、プロシヤにては貴族めきたる鼻音にて物言う「レエベマン」を見ては、往きてこれと遊ばん勇氣なし。此等の勇氣なければ、彼活潑なる同郷の人々と交らんようもなし。この交際の疎きがために、彼人々は唯余を嘲り、余を嫉むのみならず、又余を猜疑することとなりぬ。これぞ余が冤罪を身に負いて、暫時の間に無量の艱難を閱し尽す媒なりける。

或る日の夕暮なりしが、余は獸苑を漫步して、ウンテル・デン・リンデンを過ぎ、我がモンビシニュー街の僑居に帰らんと、クロステル巷の古寺の前に来ぬ。
余は彼の燈火の海を渡り来て、この狭く薄暗き巷に入り、樓上の木欄に干したる敷布、襦袢などまだ取入れぬ人家、頬髭長きユダヤ教徒の翁が戸前に佇みたる居酒屋、一つの梯は直ちに樓に達し、他の梯は客住まいの鍛冶が家に通じたる貸家などに向いて、凹字の形に引籠みて立てられたる、此三百年前の遺跡を望む毎

に、心の恍惚となりて暫し佇みしこと幾度なるを知らず。

今この処を過ぎんとするとき、鎖したる寺門の扉に倚りて、声を吞みつつ泣くひとりの少女あるを見た。年は十六七なるべし。被りし巾を洩れたる髪の色は、薄きこがね色にて、着たる衣は垢つき汚れたりとも見えず。我足音に驚かされてかえりみたる面、余に詩人の筆なければこれを写すべくもあらず。この青く清らにて物問いたげに愁を含める目の、半ば露を宿せる長き睫毛に掩われたるは、何故に一顧したるのみにて、用心深き我心の底までは徹したるか。

彼は料らぬ深き歎きに遭いて、前後を顧みる違なく、ここに立ちて泣くにや。わが臆病なる心は憐憫の情に打ち勝たれて、余は寛えず側に寄り、「何故に泣き玉うか。ところに繫累なき外人は、却りて力を借し易きこともあらん」といい掛けたるが、我ながらわが大膽なるに呆れたり。

彼は驚きてわが黄なる面を打守りしが、我が真率なる心や色に形われたりけん。「君は善き人なりと見ゆ。

彼の如く酷くはあらじ。又た我母の如く」暫し洩れたる涙の泉は又溢れて愛らしき頬を流れ落つ。

「我を救い玉え、君。わが恥なき人とならんを。母はわが彼の言葉に従わねばとて、我を打ちき。父は死にたり。明日は葬らでは慚わぬに、家に一銭の貯だになし」

跡は徹歎の声のみ。我眼はこのうつむきたる少女の顫う項にのみ注がれたり。

「君が家に送り行かんに、先ず心を鎮め玉え。声をな人に聞かせ玉いそ。ここは往来なるに」彼は物語するうちに、覚えず我肩に倚りしが、この時ふと頭を擡げ、又始めてわれを見たるが如く、恥じて我側を飛びのきつ。

人を見るが厭わしさに、早足に行く少女の跡に附きて、寺の筋向いなる大戸を入れば、欠け損じたる石の梯あり。これを上ぼりて、四階目に腰を折りて潜るべき程の戸あり。少女は鑢びたる針金の先きを振じ曲げたるに、手を掛けて強く引きしに、中には咳枯れたる老嫗の声して、「誰ぞ」と問う。エリス帰りぬと答る

る間もなく、戸をあららかに引開けしは、半ば白みたる髪、悪しき相にはあらねど、貧苦の痕を額に印せし面の老嫗にて、古き獸綿の衣を着、汚れたる上靴を穿きたり。エリスの余に会釈して入るを、かれは待ち兼ねし如く、戸を劇しくたて切りつ。

余は暫し茫然として立ちたりしが、ふと油燈の光に透して戸を見れば、エルンスト・ワイゲルトと漆もて書き、下に仕立物師と注したり。これすぎぬという少女が父の名なるべし。内には言い争うごとき声聞えしが、又静になりて戸は再び明きぬ。さきの老嫗は懇懇におのが無礼の振舞せしを詫びて、余を迎え入れつ。戸の内は厨にて、右手の低き窓に、真白に洗いたる麻布を懸けたり。左手には粗末に積上げたる煉瓦の竈あり。正面の一室の戸は半ば開きたるが、内には白布を掩える臥床あり。伏したるはなき人なるべし。竈の側なる戸を開きて余を導きつ。この処は所謂「マンサルド」の街に面したる一間なれば、天井もなし。隅の屋根裏より窓に向いて斜に下れる梁を、紙にて張りたる下の、立たば頭の支うべき処に臥床あり。中央なる机

には美しき髻を掛けて、上には書物一二巻と写真帖とを列べ、陶瓶にはここに似合わしからぬ価高き花束を生けたり。それが傍に少女は羞を帯びて立てり。

彼は優れて美なり。乳の如き色の顔は燈火に映じて微紅を潮したり。手足の纖く裊なるは、貧家の女に似ず。老嫗の室を出でし跡にて、少女は少し訛りたる言葉にて云う。「許し玉え。君をここまで導きし心なさを。君は善き人なるべし。我をばよも憎み玉わじ。明日に迫るは父の葬、たのみに思いしシャウムベルヒ、君は彼を知らでやおわさん。彼は「ウィクトリア」座の座頭なり。彼が抱えとなりしより、早や二年なれば、事なく我等を助けんと思ひしに、人の憂に附けこみて、身勝手なるいい掛けせんとは。我を救い玉え、君。金をば薄き給金を拆きて還し参らせん。縦令我身は食わずとも。それもならずば母の言葉に」彼は涙ぐみて身をふるわせたり。その見上げたる目には、人に否とはいわせぬ媚態あり。この目の働きは知りてするにや、又自らは知らぬにや。

我が隠しには二三「マルク」の銀貨あれど、それに

て足るべくもあらねば、余は時計をはずして机の上に置きぬ。「これにて一時の急を凌ぎ玉え。質屋の使のモンビシュウ街三番地にて太田と尋ね来ん折には価を取らすべきに」

少女は驚き感ぜしさま見えて、余が辞別のために出したる手を唇にあてたるが、はらはらと落つる熱き涙を我手の背に溅ぎつ。

嗚呼、何等の悪因ぞ。この恩を謝せんとて、自ら我僑居に來し少女は、シヨオペンハウエルを右にし、シルレルを左にして、終日兀坐する我読書の窓下に、一輪の名花を咲かせてけり。この時を始として、余と少女との交漸く繁くなりもて行きて、同郷人にさえ知られぬれば、彼等は速了にも、余を以て色を舞姫の群に漁するものとしたり。われ等二人の間にはまだ癡戯なる歡樂のみ存じたりしを。

その名を斥さんは憚あれど、同郷人の中に事を好む人ありて、余が屢々芝居に出入して、女優と交むといふことを、官長の許に報じつ。さらぬだに余が頗る學問の岐路に走るを知りて憎み思ひし官長は、遂に旨を

公使館に伝えて、我官を免じ、我職を解いたり。公使がこの命を伝うる時余に謂いしは、御身若し即時に郷に帰らば、路用を給すべけれど、若し猶ここに在らんには、公の助をば仰ぐべからずとのことなりき。余は一週日の猶予を請いて、とやこうと思ひ煩ううち、我生涯にて尤も悲痛を覚えさせたる二通の書状に接しぬ。この二通は殆ど同時にいだししものなれど、一は母の自筆、一は親族なる某が、母の死を、我がまたなく慕う母の死を報じたる書なりき。余は母の書中の言をここに反覆するに堪えず、涙の迫り来て筆の運を妨ぐればなり。

余とエリスとの交際は、この時まででは余所目に見るより清白なりき。彼は父の貧しがために、充分なる教育を受けず、十五の時舞の師のつりに応じて、この恥ずかしき業を教えられ、「クルズス」果てて後、「ウィクトリア」座に出でて、今は場中第二の地位を占めたり。されど詩人ハックレンデルが当世の奴隸といひし如く、はかなきは舞姫の身の上なり。薄き給金にて繋かれ、昼の温習、夜の舞台と緊しく使われ、芝居の

化粧部屋に入りてこそ紅粉をも粧い、美しき衣をも纏え、場外にてはひとり身の衣食も足らず勝なれば、親腹から養うものはその辛苦奈何ぞや。されば彼等の仲間にて、賤しき限りなる業に堕ちぬは稀なりとぞいうなる。エリスがこれを遣れしは、おとなしき性質と、剛氣ある父の守護とに依りてなり。彼は幼き時より物読むことをば流石に好みしかど、手に入るは卑しき「コルポルタアジュ」と唱うる貸本屋の小説のみなりしを、余と相識る頃より、余が借しつる書を読みながらいて、漸く趣味をも知り、言葉の訛をも正し、いくほどもなく余に寄するふみにも誤字少なくなりぬ。かかれば余等二人の間には先ず師弟の交りを生じたるなりき。我が不時の免官を聞きしときに、彼は色を失いつ。余は彼が身の事に関りしを包み隠しぬれど、彼は余に向いて母にはこれを秘め玉えと云いぬ。こは母の余が学資を失いしを知りて余を疎んぜんを恐れてなり。嗚呼、委くここに写さんも要なけれど、余が彼を愛する心の俄に強くなりて、遂に離れ難き中となりしは此折なりき。我一身の大事は前に横りて、洵に危急存

亡の秋なるに、この行ありしをあやしみ、又た誹る人もあるべけれど、余がエリスを愛する情は、始めて相見し時よりあさくはあらぬに、いま我数奇を憐み、又別離を悲みて伏し沈みたる面に、鬢の毛の解けてかかりたる、その美しき、いじらしき姿は、余が悲痛感慨の刺激によりて常ならずなりたる脳髓を射て、恍惚の間にここに及びしを奈何にせん。

公使に約せし日も近づき、我命はせまりぬ。このままにて郷にかえらば、学成らずして汚名を負いたる身の浮ぶ瀬あらじ。さればとて留まらんには、学資を得べき手だてなし。

此時余を助けしは今我同行の一人なる相沢謙吉なり。彼は東京に在りて、既に天方伯の秘書官たりしが、余が免官の官報に出でしを見て、某新聞紙の編輯長に説きて、余を社の通信員となし、ベルリンに留まりて政治学芸の事などを報道せしむることとなしつ。

社の報酬はいうに足らぬほどなれど、棲家をもうつし、午餐に往く食店をもかえたらんには、微なる暮しは立つべし。兎角思案する程に、心の誠を顯わし

て、助の綱をわれに投げ掛けしはエリスなりき。かれはいかに母を説き動かしけん、余は彼等親子の家に寄寓することとなり、エリスと余とはいつよりとはなしに、有るか無きかの収入を合せて、憂きがなかにも楽しき月日を送りぬ。

朝の咖啡果つれば、彼は温習に往き、さらぬ日には家に留まりて、余はキヨオニヒ街の間口せまく奥行のみいと長き休息所に赴き、あらゆる新聞を読み、鉛筆取り出でて彼此と材料を集む。この截り開きたる引窓より光を取れる室にて、定りたる業なき若人、多くもあらぬ金を人に借して己れは遊び暮す老人、取引所の業の隙を偷みて足を休むる商人などと臂を並べ、冷なる石卓の上にて、忙しげに筆を走らせ、小おんなが持て来る一盞の咖啡の冷むるをも顧みず、明きたる新聞の細長き板ぎれに挿みたるを、幾種となく掛け聯ねたるかたえの壁に、いく度となく往来する日本人を、知らぬ人は何と見けん。又一時近くなるほどに、温習に往きたる日には返り路によぎりて、余と俱に店を立出ずるこの常ならず輕き、掌上の舞をもなし

えつべき少女を、怪み見送る人もありしなるべし。

我学問は荒みぬ。屋根裏の一燈微に燃えて、エリスが劇場よりかえりて、椅に寄りて縫ものなどする側の机にて、余は新聞の原稿を書けり。昔しの法令条目の枯葉を紙上に搔寄せしとは殊にて、今は活潑々たる政界の運動、文学美術に係る新現象の批評など、彼此と結びあわせて、力の及ばん限り、ビョルネよりは寧ろハイネを学びて思を構え、様々の文を作りし中にも、引續きてウィルヘルム一世とフレデリック三世との崩殂ありて、新帝の即位、ビスマルク侯の進退如何などの事に就ては、故らに詳かなる報告をなしき。さればこの頃よりは思いしよりも忙わしくして、多くもあらぬ蔵書を繕き、旧業をたずぬることも難く、大学の籍はまだ跼られねど、謝金を収むることの難ければ、唯だ一つにしたる講筵だに往きて聴くことは稀なりき。

我学問は荒みぬ。されど余は別に一種の見識を長じき。そをいかにというに、凡そ民間学の流布したることは、歐洲諸国の間にてドイツに若くはなからん。幾百種の新聞雑誌に散見する議論には頗る高尚なるも多

きを、余は通信員となりし日より、曾て大学に繁く通いし折、養い得たる一隻の眼孔もて、読みては又読み、写しては又写す程に、今まで一筋の道をのみ走りし知識は、自ら綜括的になりて、同郷の留学生などの大かたは、夢にも知らぬ境地に到りぬ。彼等の仲間にはドイツ新聞の社説をだに善くはえ読まぬがあるに。

明治二十一年の冬は来にけり。表街の人道にてこそ沙をも蒔け、鋤をも揮え、クロステル街のあたりは凸凹坎珂の処は見ゆめれど、表のみは一面に氷りて、朝に戸を開けば飢え凍えし雀の落ちて死にたるも哀れなり。室を温め、竈に火を焚きつけても、壁の石を徹し、衣の綿を穿つ北ヨオロッパの寒さは、なかなか堪えがたかり。エリスは二三日前の夜、舞台にて卒倒しつとて、人に扶けられて帰り来しが、それより心地あしとて休み、もの食うごとに吐くを、悪阻というものならんと始めて心づきしは母なりき。嗚呼、さらぬだに覚束なきは我身の行末なるに、若し真なりせばいかにせまし。

今朝は日曜なれば家に在れど、心は楽しからず。エ